

震災によるグループホーム型仮設住宅への環境移行がもたらす認知症高齢者への影響

石井研究室 渡邊 達也

キーワード：福祉仮設住宅，グループホーム型仮設，環境移行，空間構成，認知症高齢者

1. 研究の背景と目的

東北地方沿岸部に壊滅的な被害をもたらした東日本大震災では高齢者施設も多数被害を受けた。認知症高齢者グループホーム(以下、GH)の被害も大きく、入居者40名が犠牲になった(河北新報：2011年12月13日)。

今回の震災では、被災したGHのために福祉仮設住宅が建設された。応急仮設住宅の一形態であり、高齢者や障害者のGHを意識したグループホーム型の仮設住宅(GH型仮設)として建設された。宮城県で21地区283戸、岩手県GHで10地区120戸、福島県で5地区81戸が計画・整備されている。

今回の調査対象GH(仙台市)は、津波によって建物が全壊し、入居者も6名犠牲になった。生き残った利用者は系列のGH-Aに移動し、約5ヶ月間過ごした。その後、GH型仮設の開設によりGH-Bへと転居することとなる。

仮設GH-Bは2ユニット(9名×2ユニット)からなる。プレハブ仮設だが、バリアフリーでトイレや浴室などは介助用の設備仕様で建てられた。300mほど離れたところには大きな仮設住宅団地があるが、一体的に整備されることなく、GH2ユニットだけ独立して整備された。また敷地に余裕があったことから、併せて畑が整備された。

本研究ではGH型仮設に移行した認知症高齢者の生活行動の変化や仮設のGH空間が与える入居者やスタッフへの影響を明らかにすることを目的とする。

2. 調査の方法

スタッフによるケース記録から、調査対象とした入居者5名の7/22～11/30までの生活行動を抽出した。加えてスタッフへのヒアリング調査と、5名の利用者の行動観察調査を継続して行い、行動の変化を分析した。

3. 結果と考察

表1 GH A、GH B(入居初期)、GH B(入居現在)の入居者とスタッフの行動調査

	A	B	C	D	E	スタッフ
年齢/性別	87/女性	87/女性	83/女性	86/女性	87/女性	—
震災以前の要介護度	2	1	1	1	1	—
GH Aでの様子	逃げ場のない集団生活にストレスを感じていた。ストレスはスタッフに対する拒絶や入居者に対しての罵倒、物へあたる行為として表れた。外部者(ボランティア)に対し「ここでなくていい、他の所でやれ」発言することもある。一方で徐々に同居者と仲間意識を持つようになり、今まで見られなかった他者との積極的な交流も見られるようになる。	逃げ場のない集団生活にストレスを感じていた。元生け花の先生ということもあり、以前のGHでは生け花を趣味としていた。しかしGH-Aでは行動が制限されたため、趣味ができなくなる。それによるストレスから会話が減った。感情の起伏はあまり見られない。手伝いを頼まれても積極的に引き受ける。	プライベートスペースがなくなったことで、ストレスを溜め込み、同室のAさんと口論を起こす。普段は自室でもこもって過ごしていた。GH-Aでは自室(個室)が無い、ベンチでスタッフや友人と談笑して過ごす。スタッフの手伝いは積極的に、ムードメーカーとして場を明るくしている。	逃げ場のない集団生活にストレスを感じていた。それから逃げようとして自らベンチに腰を掛け、ゆったりと過ごす様子が見られる。友人と過ごせる時間が多いため穏やかに過ごし、目立った行動の変化は見られない。またスタッフに手伝いの声がけをされると積極的に手伝う。	逃げ場のない集団生活にストレスを感じていた。常に同居人に気遣いをしており、トラブルを起こさぬよう振る舞い、ストレスを内側にためているようだ。Aさんが室内の窓を開け、外から熱風が入って来た時も、「暑いから閉めてもらえますか?」とスタッフに相談し、自分から勝手に開めることを避けている。	GH-Aではスタッフ数も倍近くに増えたことにより、入居者と関わる機会が増えた。一方でスタッフ数が空間の面積に対し多すぎる形にもなる。空間が狭くなったことによりスタッフの行動も制限されるようになる。
GH B(入居初期)	転居当初から仮設GHの空間を批判し続け「こんな家見たこと無い」「寄宿舎のようなところだ」と発言。和室や畳がなく、床もフローリングではないため、以前のGHとの違和感を感じている。自室も落ち付かないようで、リビングへ行くことが多く、他者とのコミュニケーションを求める様子が見られた。	転居後1週間が経つと、本人から隣のユニットに移動したいとの申し出があった。「なんで私だけ一人ぼっちなの、上の人に言っちゃおうだ!」と怒った様子を見せる。友人と離れ離れになったことにより、コミュニケーションが取れずストレスを抱えていた。そのためか外出行動が減り、不活性になる。	食事の際に本人の席に他の入居者が座っており、泣き出しそうになる。「また私だけこんな目にあつて」と話し自分の居場所を取られたと感じる。仮設GHの空間と環境の影響により生活行動が変化し、夜間に起き出しの行動が見られようになる。	仮設GHへ入居した心境を聞くと「しんどいですね」と話す。転居を繰り返し、なじみのない環境に移行したことにより、心の整理ができていないようである。仮設が家だと感じられず、涙を流す場面もあり、「この床じゃあ冷たくて、温もりが無いわね」と話す。	仮設GH入居当初、仮設の環境や空間に違和感を感じ、「寂しいところに来ちゃたわね」と涙を流す。GH入居以前に世話をしていた猫のことをたびたび思い出しては不安定になる。一人であるのが寂しく、常に友人のそばにいる。	仮設GHをどのように利用していくか迷いが見られる。しかし以前と同じように利用者との関係を保ち、積極的に話し掛けながら利用者の不安を取り除くよう心がけている。空間が広がり、移動範囲が増えた。
GH B(入居現在)	限定された空間での生活にストレスを感じ、一人での散歩回数が増える。徐々に行動範囲を広げ、一人では仮設への帰宅が困難となる。仮設環境にストレスを感じ、人や物への攻撃的な行動が増える。認知症の悪化が顕著となり、仮設GHでの生活が困難となり、病院へ移ることになる。	ユニット1から2に移動してからは生活の活性化が見られる。友人やスタッフと会話することによりストレスが少なくなったようだ。日常では攻撃的な行動は見られないが、スタッフや入居者の言動が気になる。また仮設を自宅との認識が強く、他者が自分の部屋に入ることを拒む。	急激に短期記憶の低下がうかがわれる。他の入居者の誕生日が行われた時も「私の誕生日は祝ってくれなかったの!」と話し、記憶に全く残っていない様子。日常生活では攻撃的な行動は見られないが、自分だけ仲間外れにされると、感情が表に出す。	入居当初に比べ認知症が進行。見当識障害が進む。運動教室でも、新しい運動を教えられると混乱してしまい、上手に運動する他者を気に掛けている。攻撃的な行動は見られず、ストレスを表に出さない。	仮設GHでの不満はあまりないようで、認知症の進行なども見られない。散歩に出掛ける際には1番後ろを歩き、以前と同様、他者に気を掛ける。最近では身体的な不調を訴えることも多く、安静のため室内で過ごす。攻撃的な行動は見られず、ストレスも表に出さない。	空間が広がったことで、スタッフの仕事量が増えた。仮設ではトイレ、居室がそれぞれ一箇所にとまめられているため、一つの作業をしながら他の入居者とコミュニケーションを取ることが出来ない。その結果、利用者とのコミュニケーションを取る機会が減る。スタッフの逃げ場もできてしまった。

3-1 空間の変化による影響 (表1)

GH-Aでは、もともと居住していた18名(9名×2ユニット)に被災した11名が加わり29名での暮らしとなった。就寝も含めて移った5～6名ずつが6畳の和室で暮らす形となった(図1, 図2)。逃げ場のない集団生活でストレスになる部分もみられた。一方で、入居者同士のコミュニケーションの機会が増えた。スタッフ数も倍になったことにより、入居者と関わる機会も増えた。

5ヶ月間のGH-Aでの暮らしの後、仮設GH-Bに移った。GH-Bでは個室が与えられた。個々で過ごす時間が増えたが、入居者同士のコミュニケーションの機会が減った。また空間が広がったことにより、入居者同士、入居者とスタッフ間での関わりが希薄となった。

仮設GH-Bの「住宅的」ではないその雰囲気と空間の構成、見慣れない周辺環境の景色など、それまで暮らしていた環境との相違は明らかにストレスを与えた。「こんな家みたことない」、「寄宿舍のようなところだ」と感じて発言する人もいた。共用空間がリビング一室しかなく、滞在場所が限定されたことも生活や行動に影響を与えた。

3-2 環境移行がもたらした入居者への影響

転居を繰り返し、なじみのない環境に移行したことにより、Aさんは空間や生活から来るストレスにより攻撃的な行動が増え、認知症の症状の悪化が顕著となった。GHでの生活ができなくなり入院する事態となる。Cさん

は明らかに記憶の障害が進行した。Dさんも認知症が以前より進行した。GH-A、そして仮設のGH-Bへの環境移行が症状の悪化を引き起こし、様々な形で露見するようになった。度重なる移行やその環境が直接的な要因とも限らないが、明らかにその空間や環境が認知症高齢者のストレスとなって作用しているであろうことは、行動観察やスタッフへのヒアリングから明らかになった。

3-3 外出行動や地域との関わり

仮設GH-Bに設けられた畑の半分は、近隣の仮設住宅団地の住民に開放した。一方で、仮設住宅団地内で開催される運動教室に、GH利用者も参加することで地域や他の人々とのつながりや交流を求める動きを展開し始めた。いかにしてGHがなじみのない地域となじんで行くかは、今後の重要な課題となる。

4. まとめ

被災した認知症高齢者にとって、度重なる環境移行や、なじみのない地域、空間での生活は少なからぬ影響があった。それは認知症の進行という形で現れている。環境移行が症状の悪化につながることを考えると、転居後の空間のあり方は重要である。GH型仮設住宅の空間的なあり方、福祉仮設住宅のあり方など、今後の災害に向けたさらなる検証が必要であると同時に、GH型仮設での暮らしの影響を、長期的・継続的に調査して行くこともきわめて重要となる。

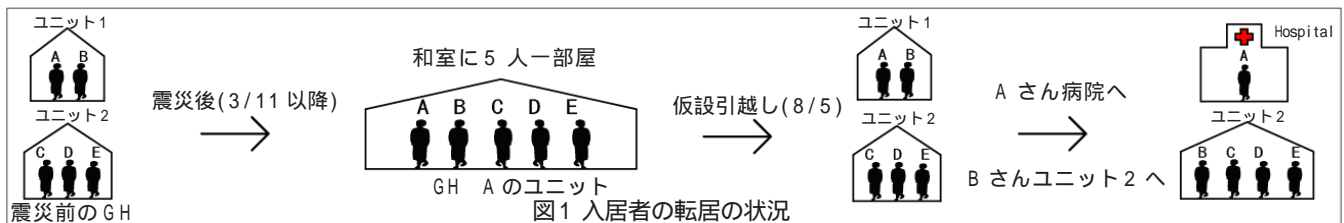


図1 入居者の転居の状況



図2 転居のプロセス (左: 震災前GHの平面図 中: GH-Aの平面図 右: 仮設GH-Bの平面図)